

どんな子どもになってほしいのか？ 言語化できますか？

組織局長 岡本 美穂

みなさんは、担任する子どもたちが1年後どんな子どもになってほしいですか。それを言語化することはできますか。学級目標を子どもとともに考えるという実践をよく聞きます。しかし、そもそも教師が目の前の子どもたちがどのようなようになってほしいのか、どんな成長を期待しているのか、言えないということがあるものです。

チームとは「目標」「ゴールイメージ」が自然と共有されており、それに向かってみんなが一致団結できるからこそ意味があるものになるのです。学級の子どもたちがどんな姿になってほしいのかを、まずは教師自身が言語化して、学年の先生と共有することが大事です

黄金の3日間？

新任の頃は「黄金の三日間」をどうこなしていくのか、どうそこを盛り上げてやっていくのかに、全力を注いでいたように思います。しかし、十年以上たった今思うの

は、そこと普段をどれだけつなげて考えられるかが大事だということです。つまり、そこだけ頑張るから子どもは先生の力を見抜き「教師をなめる」というような行動になるということです。最初は、

面白そうな先生だと思ったのに…

いい学級になりそうだと思ったのに…
と思いつつ、がっかりするのです。敏感な子どもでしたら、裏切られたような感覚になることさえあります。

学級づくり、生徒指導などすべて大事です。しかし、それはあくまでも「考え方」であって、技術・やり方、HOW TO になってはいけません。コミュニケーション力をつけたいから「学級づくり」のアクティビティーをする。もっと子ども同士が仲良くなつてほしいからゲームをする。春に出た新刊の題名を見ているとそんなものばかりです。きっと以前の私であつたら真つ先に読んでいたと思います。しかし、

それはあくまでも「考え方」なのです。だからこそ、当たり前前に全国の教師が行っていることの意味を見直し、価値を見出し、どの子どもも伸ばせるシステムにしていく時期、それが今なのです。3日間だけ頑張っても全く意味がありません。

「3・7・30の法則」

「3・7・30の法則」とは野中信行氏の造語です。初めの3日間だけではなく、その後の7日間、30日間でも果たすべきポイントがあると『学級経営力を高める3・7・30の法則』の中で野中氏は伝えています。

「3」の法則（最初の3日間）

最初の3日間で意識すべきこと、それは教師への「信頼感」です。この先生は、自分を大事にしてくれる、伸ばしてくれる、と思わなくてははいけません。だからこそ、この時期は徹底的に、個人を通して全体を評価していくイメージです。個人個人と教師が繋がるために、徹底的に良いところを探し、言葉にしながら全体に伝えていくのです。

- ・ 人はいきなりつながらない。
- ・ つながるエネルギーがいる。
- ・ 信頼できる他者の存在。

教師自身も子どもに判断されている…(この先生はどんな先生なのか?話を聞いてくれるのか?良い先生なのか?)ということ判断している時期だということを意識しておきましょう。一昨年の大会の記念講演者である赤坂真二氏は、

「情報は感情のフィルターを通る。」

と言われていました。これは、発信者のことを「好き」という前提があることで受信者は情報をスムーズに得られるということ。また、教わりたい3カ条として、

- 1 わかりやすい授業
 - 2 自分のことをわかってくれたり、ほめてくれたり
 - 3 やる気にさせてくれる、できるようにしてくれる先生だそうです。つながるエネルギーの素とは、「安心感・楽しさ・承認」
- 学力向上⇨意欲×質×量(時間)
意欲・・・やる気・雰囲気

(赤坂真二氏 講座より)と教えて下さりました。

「7」の法則(最初の1週間)

最初の1週間で意識すべきこと、それは学級への「安心感」です。この学級でよかったな、この学級が好きだな、と思わせていかなくてはいけません。そのためには、できない子を探すのではなく、できている子を探して誉める、認める。ことを土台しながら、授業で勝負します。

「ありがとう」 感謝

「ああ、なるほど」 共感

こんな言葉が自然にあふれるような教室を目指します。自然に、というのが実はポイントで、一斉に言わせるのでは意味がありません。

「30」の法則(最初の1ヶ月)

好きこそもの上手なれ、ということ、授業への「期待感」を子どもたちが感じられるように毎日の授業を意識していきます。

「好きこそもの上手なれ」この言葉は、「誰でも好きでやっていることは一生懸命になるし、それに関して勉強したり工夫したりするので、自然に上達するものである。芸事は、無理して嫌だと思いつながらやっても、成長はないということ。」とあります。つまり、好きなものを意図的にどんどん増

やすようにします。一番簡単なのは、「振り返り」をこのテーマで書くことです。五年生の最初の物語文「だいじょうぶ だいじょうぶ」で実践しました。四月は、国語では読み取りなどはほとんどしません。先生の話聴いて活動をしていたら伸びていたというような実践を行います。

音読が好き

「なぜ音読か」といつと、私は音読(読むこと)がすきだからです。なぜかといつと、丸や点に気を付けて読むことで、気持ちがすっきりするからです。」

発表

「国語の時間に、発表をあまりしかたことがなかったけど、昨日岡本先生に『一回発表しなさい』と言われて緊張してんだけど、発表したら気持ちがあすつきりしたので、発表が好きになりました。」

振り返りを読んでいただけるとわかると思いますが、国語の授業で「子どもとの関係づくり」もしています。最初は教師を信頼してもらおうように凛とした授業をいきましよう。ただし、特別なことをする必要はないのです。無理はやめましよう。